芭蕉発句考

――「旅に病で」の句をめぐって――

西原大輔

病中吟

旅に病で夢は枯野をかけ廻る　翁　（『笈日記』）

日本人が残した数多くの辞世の中でも、この句は一個の生涯を鮮やかに逆照射しているという点ですぐれたものである。芭蕉をめぐっては、従来この句から枯野の旅人というイメージが導かれ、死に臨んでもなお執着をみせたことにより、熱心な俳諧の求道者たることが確認されてきた。しかしこのような鑑賞の他に、芭蕉のもっていた別な側面を読みとることも可能である。この論文では、「旅に病で」の句の各語句について詳細に検討することにより、一句の意味するところを考えようと思う。

一、序

芭蕉の辞世句は読者の多様な鑑賞を許容しうる名句だが、解釈そのものは従来ほとんど変わることがなかった。

(1)旅中病にたおれ、うとうと眠る夜々の夢は、あちらの枯野、こちらの枯野と、寒々とした枯野をかけ回る夢である。[1]

(2)旅に病み、夢うつつの中で、彼は枯野をさまよい歩いている自分の姿を見た。五十年の生涯も、言わば枯野の旅のごときものであった。彼は夢においてさえ、何かを求め、歩きつづけている、自分の妄執の深さを見る。何か知らないが、目茶苦茶に駈けめぐっている、思いつめた自分の姿である。死を間近に予期した彼は、枯野の旅人というイメージの中に、象徴的表現を見出す。[2]

(3)旅先で死の床に臥しながらも、見る夢はただ、あの野この野と知らぬ枯野を駈け回る夢だ。[3]

(4)旅の途中に病み臥しながら、わたしは夢の中ではなお枯

野をかけめぐることである。[4]

現在の代表的な注釈書にみられるこれらの解釈は、

(A)「旅に病で」を状況説明の言葉ととらえつつ、それを芭蕉にとって障害となるマイナスの状況とみなしていること。

(B)「夢は」を、実際に芭蕉がそのような夢を見たかどうかは別にしても、睡眠中ニ見ル夢ノ中デと把握していること。

(C)「枯野を」の枯野に、旅の風景としてのイメージを感じとっていること。

(D)「かけ廻る」を、アチコチ走リマワルという現象表現と解していること。

この四点に共通性を認めることができる。従来の鑑賞及び評価はこの四点に立脚しておこなわれてきたわけだが、以下(A)〜(D)のそれぞれについて検討してゆくことにしたい。

二、「旅に病で」

(A)の「旅に病で」だが、まず旅に病むことが芭蕉にとってどのような意味をもっているかが問題となる。これについては、旅を中途であきらめなければならない無念さを強調する立場があり、頴原退蔵は

西は不知火筑紫の果てまでもと思ひ立つた旅路が、まだ半ばにも達しない中に、空しく客舎に病臥しなければならなくなった芭蕉の吟魂は、誠に夢裡にも枯野をかけめぐつた事であらう。[5]

と、旅に病むことをマイナスの方向に解釈している。加藤楸邨氏にもこれを受け継いだ考え方がみられる。

この終の旅は、西國の果を志し、長崎までと心にかけてゐたのであるが、それも思はざる泄痢の浸すところとなって、旅中客舎にたふれねばならなかった芭蕉は、夢の中になほ旅を求めてやまなかった。しかも、その夢は蕭條たる枯野をかけめぐるのである。[6]

旅に病むことは旅を中断させるので、風雅にとって妨げになったとみるこのような意見は、この句の別案によってさらに補強される。『笈日記』によれば、芭蕉は支考に対して「なをかけ廻る夢心」という別案を示したという。その初句は不明だが、「なを」に着目すれば、

「なほかけめぐる」という形は、病んでもなお、という心を強くいい現したいところから試みられた推敲であろう。[7]

という意見が導かれるのももっともだろう。

芭蕉の死をめぐる状況から演繹するこれらの解釈に対し、一方で句を生涯の旅の終着点として位置づけてみると、旅に

病むことの意味は別な様相を呈してくる。芭蕉の旅が、西行を筆頭とする古人を慕いその旧蹟を訪れるという面をもっていることは言うまでもない。遙か遠くの古人にあこがれる姿勢は芭蕉の紀行文学を貫くものであって、旅立の動機には多かれ少なかれ古人の影が揺曳している。この古人追随の姿勢が象徴的に現われている句文を年代順にひろってみると、

貞享元年

いもあらふ女西行ならば歌よまん

（『野ざらし紀行』）

貞享四年

旅人と我名よばれん初しぐれ

（『笈の小文』）

元禄二年

古人も多く旅に死せるあり。予も

（『おくのほそ道』）

貞享元年の「西行ならば」という表現には西行への憧憬と仮託がある。この段階では古人と芭蕉の距離はまだ遠いのだが、貞享四年になると距離はやや縮まってくる。「旅人と我名よばれん」という願望には、古人と同じく旅人と呼ばれることの晴れがましさがある。しかしまだ外面的な同一化であろう。それが元禄二年になると、「古人も多く旅に死せるあり」という強い断定と、「予も」という明確な意志が生じており、古人追随の姿勢を高らかに宣言したとでもいうべきものになっている。このような流れの帰着点として、

元禄七年

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

を位置づけてみると、「旅に病で」はそれまでの古人追随の姿勢を再確認したものととらえられる。古人追随の努力は、旅にたおれることによって完成したと言えよう。従って「旅に病で」とは、病気によって旅が中断される無念さというより、寧ろ古人追随の旅をしてきた自己の再確認なのではないか。「旅に病で」が字余りであり、同時にそこで切字となっている理由もそこにあると思われる。破調の字余りに続いて切字がくることにより、初句は句全体の中で独立性をもつ。その「旅に病で」とは、静かに過去をふりかえる内面の言葉であろう。また「病中吟」という前書を付しつつも、再び「旅に病で」と繰り返している以上、これは単なる事実の叙述や状況説明ではあり得ない。「今まで私は、遠く遙かな古人を追って旅をしてきたのだ」という過去確認こそが、初句のもっている意味なのである。

三、「夢は」「かけ廻る」

次いで(B)の「夢は」について考えてみよう。言葉通りに読

むならば、夢ガ枯野ヲカケ廻ッタことになるのだが、夢が動作主体となって枯野を走り回るというのは意味をなさないため、前述の如く従来は睡眠中ノ夢ノ中デと解されてきた。しかし次の例をみれば、そのような解釈が絶対的なものではあり得ないことが直観できよう。[8]

故郷

兎追いしかの山　小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて　忘れがたき故郷

（文部省唱歌、高野辰之詞）

この場合、主人公が故郷の夢を見たというより、「夢は今もめぐりて」が「忘れがたき」を言い換えた文学的表現になっていると考えるのが妥当だろう。芭蕉の発句も同様ではないか。即ち、心ガ枯野に執着シテイルを文学的に具象化して表現すると「夢は枯野をかけ廻る」になるのだろう。

このような発想の表現手法を芭蕉は漢詩から手に入れたと思われる。『芭蕉句選年考』（石河積翠著、寛政年間成）は次のような蘇東坡の漢詩を引いている。

我帰自南山　山翠猶在目
心随白雲去　夢遶山之麓

（『蘇東坡詩集』巻五）

上野洋三氏は「枯野考」[9]の中でさらに、

心随葉舟去　夢遶千山碧

（『蘇東坡詩集』巻七）

を提出している。類似の表現は他にもあり、

困眠榻香凝帳　夢遶千巖冷逼身

（『蘇東坡詩集』巻十）

夢繞雲山心似鹿　魂驚湯火命如雞

（『蘇東坡詩集』巻十九）

十年江海寄浮沈　夢繞江南黄葦林

（『蘇東坡詩集』巻二十九）

後夜逐君還　夢繞湖邊路

（『蘇東坡詩集』巻三十五）

夢繞呉山卻月廊　白梅盧橘覺猶香

（『蘇東坡詩集』巻三十六）

東坡詩以外では、

夢魂和月繞秦隴　漢節落毛何處尋

（『黄山谷詩集』巻八）

横槊賦詩非復昔　夢魂猶繞古梁州

（『陸放翁詩鈔』）

壯心自笑何時豁　夢遶祁連古戦場

（『陸放翁詩鈔』）

また李白の有名な「太原早秋」には、

夢繞邊城月　心飛故國樓

（『李太白詩集』巻二十一）

とあるように、「夢ハ遶ル」「夢ハ繞ル」という表現は漢詩において頻出のものである。いずれも、夢ノ中デドコソコノ風景ヲ見タという意味ではなく、心ガドコソコヲ離レナイと解釈できる。芭蕉がこれらの表現を意識的に借用したかどうか、今となっては確かめるすべはない。しかし和漢の古典に精通していた芭蕉のことであるから、発想の源泉が漢詩にあったことは十分想像しうる。これらの漢籍に平行した表現を用いたのが芭蕉の辞世句だと思われる。

ここでさらに、(D)の「かけ廻る」について検討したい。従来「かけ廻る」は走リマワルと解釈されてきたが、はたして適切と言えるだろうか。確かに「かけ廻る」という言葉は、当時走リマワルという意で使われていた。

世界をいだてんのかけ廻るごとく

（振り仮名は原本通り）

（『世間胸算用』巻三、二）

芭蕉の書簡にも、

方々かけまわり申候はゞ、又〳〵美濃筋へ出可申候間、其節万々可得御意候。

（元禄二年九月十五日付、木因宛）

などとある。しかし、志田義秀著『問題の点を主としたる芭蕉伝記の研究』で考証されているように、この句の場合あくまで「かけ廻る」と読まねばならないから、「かけ廻る」と同列に論じることはできない。また、芭蕉全作品中「かけ廻る」が使われているのはこの句のみであり、芭蕉独自の使い方を論ずることは困難である。

そこで、「かけ廻る」が二つの動詞をもとに成り立っている複合動詞であり、一方の「廻る」という言葉は謡曲によって深化された歴史をもつ語であることに着目したい。謡曲においてあまりにも頻繁に用いられている「廻る」は、次のような形で現れている。

(1)身はなほ牛の小車の、めぐりめぐり来ていつまでぞ、妄執を晴らし給へや、妄執を晴らし給へや　（『野宮』）

(2)因果の小車の、火宅の門を出でざれば、廻り廻れども、生死の海は離るまじや、あぢきなの憂き世や（『砧』）

(3)春は梢に、咲くかと待ちし、花を尋ねて、山廻り。秋はさやけき、影を尋ねて、月見る方にと山廻り。冬は冴え行く、時雨の雲の、雪を誘ひて、山廻り。廻り廻りて輪廻を離れぬ、妄執の雲の、塵積って、　（『山姥』）

(4)その執心の修羅の道、めぐりめぐりてまたここに　（『実盛』）

(5)捨てても廻る世の中は、捨てても廻る世の中は、心の隔てなりけり　（『梅枝』）

謡曲でのこれらの用法が、単にまわりをぐるぐるまわるという現象を指示するにとどまらず、そこには内面的な意味が付

与されている。(1)・(3)では「妄執」、(4)では「執心」という言葉で言い換えられているように、「廻る」は、離れたくても離れられないという精神の状態を現象面において具体化した言葉だと思われる。仏教の輪廻思想の影響を受けていることが考えられるが、だからこそ「生死の海は離るまじ」となるのであり、「捨てても廻る」なのである。つまり「廻る」の意味するところは、「そこにとどまってしまい、離れることができない」ということになろう。芭蕉も「廻る」という語を使っており、

松風や軒をめぐって秋暮ぬ

名月や池をめぐりて夜もすがら

長嘯の墓もめぐるか鉢たたき

以上三句がそれである。そのものに魅かれる精神状態を、具体的・現象的な言葉に置き換えたのが「めぐる」であろう。「旅に病で」の句にもどれば、後半部は「心が枯野にとどまってしまい、離れることができない」という程の意味だと考えられる。

四、「枯野を」

芭蕉は、心が離れなかったのが(C)の「枯野」だと言うのだが、この句において「枯野」は季語となっており、句全体の内容を規定する大切な一語である。従ってこの論文も、「枯野」を考証の中心におくことになる。前にも述べたとおり、枯野は旅を象徴する風景とされてきた。山本健吉の「五十年の生涯も、言わば「枯野の旅」の如きものであった」[10]という発言に代表されるこの考えは、現在広く認められているのだが、なぜ枯野が旅を象徴しうるのかを考察した人はみあたらない。芭蕉のもっていた枯野のイメージを探りたいのだが、芭蕉はその全作品中僅か二度しか枯野という語を用いていない。他の一例は『続の原』の判詞にあり、

四番　枯野

左勝

杉苗も枯野に目だつあらし哉　枳風

右

石橋をかれ野に渡す入日かな　全峯

左の句、木枯の吹盡して苗杉のそよ〳〵と動たる、風のやどり目にたつべきもの也。寸松虹梁の姿をふくみて一句の丈高し。右も又、枯野の風景見捨がたく侍らん。

（『日本俳書大系』による）

とあるが、旅のイメージとは結び付かないのである。

一方、視野を広げて日本文学の伝統の中で枯野に付与されてきたイメージを振りかえってみると、別な枯野の姿が明らかになる。以下、枯野の文学史を追っていくことにしたい。

枯野は平安時代において、主に襲の色目の名として使われた。しかし、冬枯れの野原をさす枯野の用法が文学作品に現れるのは、十二世紀初頭の『堀河百首』以後である。

秋風になびき〳〵て花すゝき
枯野にならんことをしぞ思ふ　永縁

まことにや冬は来にけりむべしこそ
枯野の虫の声絶えにけれ　基俊

とあるのを嚆矢とし、勅撰和歌集では『千載集』に、前書を付して、

秋はつるかれのゝむしのこゑたえば
ありやなしやを人のとへかし[11]

とあるのが最初で、次いで『新古今和歌集』には、芭蕉が敬慕してやまなかった西行の

みちの国へまかれりける野中に、めにたつさまなるつかの侍りけるを、問はせ侍りければ、これなん中将のつかと申すとこたへければ、中将とはいづれの人ぞとひ侍りければ、実力朝臣のこととなむ申しけるに、冬のことにてしもがれのすすきほのぼの見えわたりて、をりふし物がなしうおぼえ侍りければ　西行法師

くちもせぬその名ばかりをとどめおきて
枯野の薄かたみにぞみる

（巻第八哀傷歌七九三）[12]

が、『新古今和歌集』中唯一の用例である。このように見てくると、和歌の中で枯野が用いられるのが意外に少ないことに気付く。そしてこの枯野を好んで使い始めたのは、実に芭蕉の尊敬する西行であった。

生ひかはるはるのわかくさまちわびて
はらのかれ野にきぎすなくなり
（『山家集』上・春）

霜かづくかれのの草のさびしきに
いつかは人のこころとむらむ
（『山家集』上・冬）

はなにおくつゆにやどりしかげよりも
枯野の月はあはれなりけり
（『山家集』上・冬）

秋の色はかれ野ながらもあるものを
よのはかなさやあさちふのつゆ
（『山家集』中・雑）

枯野うづむ雪に心をまかすれば
あたりの原に雉子なくなり
（『西行和歌拾遺』）

さびしさは秋みし頃にかへりけり
枯野をてらす有明の月
（『西行和歌拾遺』）

見ればげに心もそれになりぞゆく
枯野のすすき有明の月[13]

（『西行和歌拾遺』）

先にあげた『新古今和歌集』の例を含めて八例、他に二例の詞書、計十例の枯野を西行は使っている。しかし旅と直接結びついた用法はなく、寧ろさびしさ・はかなさといった心情の中で存在している。枯野は西行によって洗練されていった歌語だと言えよう。西行なきあと『夫木和歌抄』では枯野が類題として登場し、歌語としての定着がみられる。さらに連歌から俳諧へと流れていくのだが、詳細は『芭蕉と古典―元禄時代―』[14]にゆだねたい。

このように和歌・連歌の世界でさびしさ・はかなさと結びついた枯野は、仏教説話の中において、無常観にとりこまれてゆく。十三世紀に成立したとされる仏教説話集『撰集抄』にも、枯野がしばしば用いられている。言うまでもない事だが、『撰集抄』は江戸時代においては西行の編著と信じられ、五百年來昔、西行の撰集抄に多くの乞食をあげられ候。愚眼故能人見付ざる悲しさに二たび西上人をおもひかへしたる迄ニ御坐候。

（元禄三年四月十日附　此筋・千川宛書簡）

撰集抄の昔をおもひ出候まゝ如〻此申候。

（元禄三年正月二日附、荷兮宛書簡）

とあるとおり、芭蕉の根幹に抜きさしならない影響を与えた書物である。この『撰集抄』に登場する枯野は、おおよそある一定の文脈の中でしか現れることがなく、使われ方が実にはっきりしている。『撰集抄』の中の枯野は、

(1)巻第一、八　行賀僧都耳を切る事
(2)巻第二、五　雲林院の説法を聴聞して発心する事
(3)巻第三、九　葛木の僧の事
(4)巻第四、六　慶縁得業の事
(5)巻第四、七　明雲僧正の事
(6)巻第六、二　人々夭亡の事
(7)巻第六、七　恵心僧都の事

以上七話の中に各一例ずつ用いられている。『撰集抄』に含まれている説話の多くは、発心譚をはじめとする仏教説話であり、作品中においてこの世を無常なものと捉え、極楽浄土へのあこがれをもちつつ僧の言行を記すことに特徴がある。このような傾向の中で、枯野は現世の無常と結びつけられている。

悲しき哉、昨日ありし人、けふはなし。朝に世路に誇るたぐひ、夕べには白骨となり、月をながむる友、たちまちに零落し、花にたづさふる族、むなしく風にさそはれて、跡なくなりぬる世の中に、おろかに思ひをとゞめて、いたづらに我身につもる年月の、首は露の霜にかはりて、

長月の末野の原の枯野の草にたぐへて、跡なくなりはてんとすることをも思はず、心のあるにまかせて、秋のながきよすがら、その事となくねぶりて、はかなき夢をのみ見て、むなしく月日を過ごさん、げにも心うきわざなるべし。[15]　（巻二、五）

比は神無月の十日あまりの事に侍れば、月はかげする木木のなけれども、はれくもるひかりは一方ならず物あはれなるを、木の葉がくれに行く嵐の、かれ野のすゝきによわりて、そよめきわたり、世を秋風のはげしくて、涙にそむる紅葉のもろくちるさまなんどにも、無常思ひしられて、あはれなるぞや。　（巻三、九）

などを見れば明らかなように、生命力の涸渇した枯野の風景は、人間の死などと重ねあわせられることにより、無常観と深く結びついている。他にも、

飛鳥川、淵は瀬に成り、瀬は又淵と成り、木草おなじく、枯野の原になり、山もかれ海もあせぬる世の中に　（巻四、七）

すでに月日のつもりて、夜寒に秋の末にのぞみ、霜さえて、枯野の薄あともなく、木々の紅葉散りはてゝ、枝には雪のふりかはり、雪だに消え侍りし有様、盛衰の姿、無常転変のかなしみ侍り。　（巻六、二）

枯野の草の原、露のやどりしげからんと覚えて、何とくあはれなるにつけても世のさだめなき事の思われて、　（巻六、七）

と、同様な使い方がされている。このような枯野のイメージが、中世仏教説話の理想郷たる浄土と正反対の位置にあることは明らかである。枯野という語が、芭蕉の敬慕した西行と密切な関係にある以上、「夢は枯野をかけ廻る」の枯野もまた、彼岸の浄土に対置されるべき此岸の現世に属するものではなかろうか。なお『撰集抄』にみられる枯野の残る二例は、

筆のたち所も、枯れ野にさせるさゝがにの、いとかきみだし　（巻一、七）

霜をかさぬる雪の上に、枯野の原を草枕としてふし給ひけん　（巻四、六）

である。以上のような和歌・説話の他、謡曲においても枯野は散見されるのだが、それぞれの文脈の中であまり大きな意味をもっていない。

声も枯野の虫の音の、乱るる草の花心

という『砧』の用例の如く、芭蕉の枯野と特殊なかかわりをもつものではない。他の謡曲[16]の場合も同様である。やはり、芭蕉の枯野は西行と深く結びついたものと言える。西行を慕って旅をしてきた生涯、その終着点においてこのような句が詠まれたのは、決して偶然ではあるまい。

五、宗教と文学

これまでやや文献的に考証してきたが、ではこのような句中の各語句はいったい何を物語るのか。まず西行の辞世をみてみたい。

願はくは花のしたにて春死なん
そのきさらぎの望月の頃

（『山家集』春・上）

既成の知識を確認すれば、二月十五日は釈迦入滅の日であり、一首は浄土への願望を言ったものである。これに比べると、芭蕉の辞世句はどうなのか。あたかも『撰集抄』において枯野が浄土の対極にあったように、枯野の句には西行の如き宗教的世界への願望はみられない。いやむしろ、心が枯野を離れないというのである。芭蕉の内面において宗教はどのように解決されていたのか。

支考の『笈日記』によれば、句を詠んだあとで芭蕉は次のように言ったという。

みづから申されけるは、はた生死の転変を前にをきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もやゝ半百に過たれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の声におどろく。是を仏の妄執といましめ給へる、たゞちは今の身の上におぼえ侍る也。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみおもふはと、かへすゞくやみ申されし也。

仏教の教義に照らせば俳諧は狂言綺語であるから、もう俳諧を忘れたいと芭蕉は言う。この言葉を支えているのは仏教の論理である。それならば、辞世の句には静かな仏心こそふさわしい。しかし翌日、芭蕉は以前に詠んだ

大井川浪に塵なし夏の月

の句を

清瀧や波にちり込青松葉　翁

に推敲しなおしており、決して俳諧を忘れたわけではなかった。これは宗教というものが、芭蕉にとって魂を揺るがすほどの大問題ではなかったことを明らかにしている。それと同時に、芭蕉が宗教の呪縛から自由でなかったことをも意味していると思われる。枯野の句にあえて「病中吟」と前書を付し、決して辞世とは認めなかったのも、辞世は悟りの心境を表現するべきであるという仏教的価値観に束縛されてのことだと言える。俳諧は「妄執」だからもう忘れてしまいたいという発言とはうらはらに、芭蕉はあくまで俳諧にこだわった。宗教の論理をふりかざしつつ文学に帰してゆく姿は、宗教者西行を慕ってきた自己の旅を確認しつつも、結局現世の枯野を離れないという辞世句そのものの姿と重なってくる。「旅

に病で」の句は、芭蕉の内面における宗教と文学の相剋を象徴した句だと言えよう。それは先に考証したとおり、句中の各語句より自ずから明らかだと思われる。

以上の検討を踏まえると、「旅に病で」の句は次のような解釈が妥当と思われる。

仏道修行の旅に死んだ西行と同じく、私も旅の途上で病を得た。しかし私の偽わらない正直な心は、西行が理想とした浄土へとは向かわず、却ってこの世の無常の象徴である枯野にとどまって、決して離れることがない。

六、結

繰り返しになるが、この論文で私が主張したかったことは、

(A)西行を筆頭とする古人を追って旅をしてきた、そのような自己を再確認する言葉が「旅に病で」であること。

(B)「夢は」という表現は、夢ノ中デ芭蕉ガと解釈するよりも、漢詩に発想を得た修辞であるとみなすのが、より適切であること。

(C)「枯野を」の枯野は、現世の無常と結びついた言葉として浄土に対置されるものであり、その発想には西行がかかわっていること。

(D)「かけ廻る」とは、走リマワルという現象的表現であるが、離レルコトガデキナイという内面的意味を含んでいること。

以上の四点である。そしてこのような表現から、芭蕉が宗教的彼岸たる浄土ではなく、枯野という現世の風景に強く魅かれていったことが読みとれるのは先に述べたとおりである。

そもそも文学というものは、悟り切った宗教的境地からは生まれないものなのであろうか。漱石が円覚寺に参禅しつつも『門』の中に救いを得られなかったように、あるいは芥川がキリスト教に引かれながらも、結局『西方の人』の列に加わらなかったように、芭蕉もまた、浄土ではなく無常の枯野に帰っていった。宗教が濃厚な力をもっていたのが中世であり、その代表とも言えるのが西行だとすれば、宗教がしだいに影響力を失っていくのが、近世という芭蕉の生きた時代の姿でもあった。芭蕉は自らを諸国をめぐる行脚僧になぞらえていたのだが、実際に彼がやっていたことは文学の浮かれ歩きだった。宗教者の装いをしつつ、結局芭蕉は俳諧師なのである。「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」という辞世句は、そのような文学者としての芭蕉のあり方を象徴しているように思われる。

注

(1) 井本農一訳、日本古典文学全集『松尾芭蕉集』昭和四十七年、小学館
(2) 山本健吉著、日本古典文庫『芭蕉名句集』昭和五十二年、河出書房新社
(3) 今栄蔵訳、新潮日本古典集成『芭蕉句集』昭和五十七年、新潮社
(4) 谷地快一訳、『芭蕉講座』巻四巻　昭和五十八年、有精堂
(5) 顕原退蔵著、『俳諧名作集』昭和十年、講談社
(6) 加藤楸邨評、『芭蕉講座』第三巻発句篇(下)　昭和二十三年、三省堂
(7) 須藤松雄著『芭蕉の自然』昭和五十七年、明治書院
(8) 「夢は――かけ廻る」の解釈については、三浦俊彦氏の「風雅のパラドクスと芭蕉――「枯野をかけめぐる」ものの考察――」(比較文学・文化論集　第六号)に興味深い論がある。三浦氏は、夢ニオイテ芭蕉ガ枯野ヲカケ廻ッタとする従来の解釈に対し、「かけ廻る」の主語はあくまでも「夢」でなければならないと主張されている。
(9) 上野洋三著『芭蕉論』所収、昭和六十一年、筑摩書房
(10) 山本健吉著『芭蕉　その鑑賞と批評』昭和三十二年、新潮社
(11) 『千載集』巻第十七、雑歌中、一〇九三　藤原基俊
(12) 前書を含め、ほぼ同内容のものが『山家集』にもみられる。
(13) 『ささめごと』において心敬は、この和歌の下の句を「さび」と結びつけて論じている。枯野を「さび」の風景とするのは故なしとしない。詳細は復本一郎著『さび―俊成より芭蕉への展開―』昭和五十八年、塙書房参照。
(14) 広田二郎著、昭和六十二年、明治書院
(15) 本文は小島孝之・浅見和彦編『撰集抄』昭和六十年、桜楓社によった。以下同じ。
(16) 『項羽』、『三笑』、『源氏供養』、『草薙』、『小鍛冶』などにみられる。